

# 改元なき時代の終り

古 山 登

九月末頃から、長かった昭和の終焉が囁かれながら、どうやら無事に昭和六十四年に持ち越した一九八八年は、元号変更の有無とは関わりなく、私にとっては、一つの時代の終りを告げる年となった。

先ず、四月九日の田宮（虎彦）さんの自殺と、翌十日の桑原（武夫）さんの急逝。

田宮さんは明治四十四年東京で生まれたが、父親が船員であったため、幼少年期を高知、下関、姫路、神戸などの港町を母親の鹿衛さんと共に転々とした。一種の母子家庭で、田宮さんの母親思いと、家族や隣人への無類の優しさは、この時代に培われたものであらう。

田宮さんは、戦前既に武田麟太郎や高見順らの『日曆』や『人民文庫』に加わり文学活動を始めていたが、本格的に作家活動を開始したのは、昭和二十二年『霧の中』を『世界文化』十一月号に発表してからであった。

爾来『落城』（昭24）『足摺岬』（同）『菊坂』（昭25）『鷺』（同）『会藩白虎隊』（昭26）『朝鮮ダリア』（同）『異端の子』（昭27）『ある女の生涯』（同）等の秀作を年々発表、文芸ジャーナリズムに確固たる

地歩を着々築いていったが、その陰には千代夫人の内助の功が強く働いていた。

田宮さんは、脱稿するとその作品を編集者に渡す前に必ず夫人の千代さんに読ませた。千代さんは文芸評論家ではないから決して批評がましいことは言わないが、読者の一人、最良の読者として読後感を述べ、田宮さんは田宮さんで、その読後感を謙虚に読者の声として聞き、夫婦、即作者と読者が納得できるまで話し合うのであった。

だから、千代さんの死（昭31）は田宮さんにとって大きな痛手だったが、更に追討ちをかけたのがいわゆる『愛のかたみ』騒ぎであった。

これは、田宮夫妻の恋人時代の往復書簡を、初め自家版として小部数作ったものだったが、版元ではそのまま埋もれさせることを惜しみ、流布本を発行、たちまちベストセラーになったことに端を発した。二人の純粋で美しい愛を賞讃する読者は多かったが、批評家の一部が、妻の死をタネに売名と金儲けを計るとは作家にあるまじき所行とか、こんな男こそ逆に一年も経つとケロリと新しい女を見つ

けて再婚するものだ、などといった非難の声を挙げた。そんな無責任な中傷的言辭は無視してしまえばよかったのだが、当の田宮さんにはこれが余程こたえたものらしく、『愛のかたみ』そのものは絶版、御当人はこれを機に筆を折り、十五年後に『沖繩の手記から』(昭47)でひっそりと文壇復帰する迄、沈黙を守りつづけたのであった。

桑原さんの場合は、京都一中、三高、京大と名門校コースを歩み、京大仏文科卒業後も大谷大学、三高、京大、大阪高校、東北大の各教職を歴任、学者として順調に進んだが、敗戦後『世界』昭和二十一年十一月号に「第二藝術——現代俳句について」を發表、俳壇、歌壇はいうまでもなく、日本近代文学そのものの再評価に関わるものとして激しい論争を呼び起こし、一躍総合雑誌の有力寄稿者としてジャーナリズムに躍り出た。

当時桑原さんは既に仏文学者として一家を成していたが、専門の分野だけではなく芸術、思想、社会、教育など現代文化の百般に通じた真の知識人、自由人の典型として、戦後の文化界に大きな影響を与えた。

私が桑原さんの大きさを最も強く感銘させられたのは、昭和四十年代の日本ペンクラブの危機に際しての活躍だった。

当時ペンクラブ会長であった石川達三氏の、「二つの自由」発言問題を頂点に、戦後から言論・思想・表現の自由を獲得し守ることを目的として生きつづけてきた日本ペンクラブが初めて外圧からではなく迎えた最大の危機を、桑原さんは、副会長として、また関西地区の代表者として、事態の收拾と再建に当たったが、その手腕と貫禄は、なまかなイデオログには見られぬ見事さであった。

次に、五月七日に亡くなった山本(健吉)さんの、古典と現代文学を国文学の造詣を駆使してその断絶を埋め、短歌や俳句などの短詩型の文学からポエムを抽き出して現代文学の中に位置づけた文学者としての功績もさることながら、私にとっては同時に人間・山本健吉の姿が強く思い起こされる。

山本さんは肺や胃腸を患い、瘦身で一見いかにも弱々しげで健康を長く気遣われていたが、仕事ぶりはエネルギーッシュで、温厚で公正な人柄から、自然に周囲に人が集まり、晩年近く文芸家協会理事長・会長として文壇をとりまとめ、同時にその立場からペンクラブ(ペンの理事でもあったが)の紛争解決に奔走、再建に大きく貢献した。

もう一つ山本さんから落せないのは、山本さんが現代流行歌のなかなかの権威で、自らもよく歌ったことである。

現代流行歌と古典和歌がどういう関係にあるか、山本さんがいつ頃から最新流行歌を歌うようになったのかは定かでないが、最晩年の十年程は歳末に催される「日本レコード大賞」の実力審査委員長を務めるほどだった。

もう三十年程もつづいている、井上(靖)さんを中心の山の会「かえる会」というのがあり、山本さんはその副会長格(メンバーは他に杉森久英氏、巖谷大四氏、新聞・出版の記者・編集者など総勢約三十名と、井上さんの代表作「氷壁」のモデルとなった石原国利氏ら「岩陵会」所属のプロ山嶽家三名)で、会本来の事業である穂高行こそ会員の老齢化につれて行われなくなってきたが、年に二回銀座のバーの土曜日の夜を借り切りで催される暑氣払いと忘年の

会では、山本さんがいつでもトリを取った。

レパートリーも豊富で、八代亜紀あり、石川さゆりあり、都はるみあり、ジュリーこと沢田研二あり、さだ・まさしありと実に賑やかだったが、いずれも最新曲ばかりで、殊にさだ・まさしが御鼻負のようだった。

歌の方は、やはり老齡には勝てず声はやや細目で堅さが見られ、音程も微かにぶれることもあったが、細目目の声も微かな音程のぶれも年輪に磨きをかけられ、演歌などは逆に一種の味わいを見せていた。

研究の方もなかなかのもので、自宅には詩評論の権威らしい膨大な蔵書と共に立派なプレイヤーとレコード・ボックスを備え、さだ・まさしものなどは殆ど全曲、中には未発売のものさえあった。そして、山本さんの愛唱歌（いつもブームになる前に愛唱していた）は必ずヒット曲になるというジンクスがあって、四十年来銀座を流している通称「金ちゃんバンド」は常に山本さんの愛唱歌をマークしていた。

西の桑原に対比される東の中村（光夫）さんが亡くなったのは七月に入ってからだった（12日）。中村さんの場合は、この二、三年來体調を崩されていて、長く病床に伏されていたから急逝というのではなかったが、衝撃はやはり大きかった。

中村さんは、東京生まれ、東京高師付属中から一高、東大と進み、一高在学中に知り合った小林秀雄に兄事、東大仏文科在学中から『文学界』に「文芸時評」を連載して早くから文芸評論家として囑目されていたが、果たして、戦後、丹羽文雄、広津和郎らとの間に繰り

広げられた「風俗小説論争」「異邦人」（カミユ）論争」など目を眩らせるものであった。

一見茫洋とした風貌で長身、錆びたゴルフクラブを平気で振り回す、文学以外の面では全く無頓着な人であったが、こと文学に関するとなると厳密で妥協を許さなかった。おまけに、三島由紀夫をして「日本一頭の良い文学者」と言わしめた程、明晰で回転の速い頭脳の持主であったから、「文学のありかた」連載を担当していた間中、私はいふん緊張して鎌倉・稲村が崎の中村さん宅を訪れたものだった。

と言つて鋭い人でありがちな偏狭さはなく、豊かな良識人で、紛争中のペンクラブの、なり手のない会長職を引き受けて、前記の桑原さん、山本さんと共に危機を乗り切り、再建し、最後の切札とも言われていた井上（靖）さんの会長職出馬の地慣らしを地道に進め、成功したのは、中村さんの公平無私な人間力の賜物であった。

中村さんとは、私が出版者を辞めてからも神奈川近代文学館の建設や鎌倉文学館のことでよくお会いした。なつかしさの尽きない存在であった。

中村さんの没後一日置いて亡くなった「お魚博士」末広恭雄氏やそのまた十日程後に永眠された武智鉄二氏のこととあれこれ思い出されるが、清水（幾太郎）さんの死（8月10日）は、一つの時代の終りを告げる象徴でもあった。

清水さんは、カリスマ性も手伝つて、全面講和か単独講和かで日本中が揺れに揺れた時期から、やはり日本中が騒然となった六十年安保までの、戦後日本の激動時代を通じて、平和運動の最前線で

運動を指導した強烈なオビニオン・リーダーとして大活躍した。

清水さんは、安保闘争後、脱イデオロギーの近代化論者に転じたこともあって、その後ジャーナリズムの表面から消えてしまっていたが、清水さんの死を以て、一つの時代の終り、とする実感は私だけではなく、この頃催された会合では元編集者の古い友人たちの何人かから同じ言葉を聞いた。

草野（心平）さんが亡くなったのは、清水さんの訃報後三月経つた十一月十二日。

草野さんとは、私が初めて編集者になった駆け出し時代、昭和二十五春から、当時「ハモニカ横丁」と称されていた新宿の飲み屋街に在った「ナルシス」という膝を寄せ合っても七、八人で満席になる小っぽけな店で、殆ど毎日のように顔を合わせていた。ということは、草野さんも私も殆ど毎日飲んでたということになるのだが、実際、あの頃は臭くて頭に来る焼酎を倦きもせずよく飲んだものだ。

草野さんは詩人に有りがちな神経質なところは全くなく、長老として既に詩壇では最高実力者でありながらいつも着物の着流しで、あっちへゆらゆら、こっちへゆらゆらと身体をゆらしながらよく飲み屋街を徘徊していた。そして、私のような駆け出しのチンピラ編集者にも気軽に声をかけてくれるのだった。

草野さんとは、私は直接の仕事の関係が余りなく、ハモニカ横丁もやがて立ち退かされてしまったし、その上、私は西武線沿線の上落合から藤沢へ、草野さんも同じく西武線井草から東村山へ越したため、新宿でお会いすることも無くなってしまったが、文芸家協会

懇親会や（国際）ペンの日など文芸関係の会合などで顔を合わせる時、目を細め「オウオウオウ」と声を出しながら寄って来てがっしり手を握ってくれたものだった。大きくて温かい手だった。

最新の『日本ペンクラブ会報』に矢口純氏が「天衣無縫の詩人草野さん」と題して草野さんを追懐しているが全くその通りで、あれだけ豪放磊落で人懐っこい、抱擁力豊かなキャラクターは最早出現しないのではないか。

清水さんの死で時代の終りを感じ、草野さんを喪つたことでその感を一層強めていたところへ、暮も押しつまった十二月二十五日に伝えられた大岡（昇平）さんの急逝は衝撃的だった。ドカンと来た。長く目を思い、いつも外出には春枝夫人が付き添っていたが足許はいかにも危うかしく、中村さんの葬儀では弔辞で絶句して気遣われではいたものの、この九月に催された「傘寿と春枝夫人との金婚式を祝う会」には元気な姿を見せ、創作意欲も独得の毒舌も盛んで皆を安心させていた矢先の訃報だった。

大岡さんと初めて会ったのは、昭和二十五年七月、私が改造社に入り、雑誌『改造』に配属されて三月目の暑い日だった。

その日、私は鎌倉・極楽寺の中山義秀さんを訪ねたのだったが、中山義秀という人は、大男で容貌はいわゆる古武士を思わせる面貌の、全体がいかつい感じの人で、話調も東北出身者らしくいかにも重々しく、話の内容も何か斬りつけて来るような感じであったから、新米編集者の私は緊張のしづめ、ただただかしまっているばかりであった。

そこへ現れたのが大岡さんであった。大岡さんも極楽寺に住んで

いて、当時一日に一度は中山さん宅を訪ねていたようだった。

新客の出現でほっとした思いで私が自己紹介すると大岡さんはこやかに応えてくれ、中山さんに向かって、

「義秀さん、また若い者を苛めてるんだろ、お前さんの悪い癖だよ」と言った。

「そんな、俺は苛めてなんぞいないぞ、ねえ君」

と虚を突かれて中山さんは口ごもるように答えたが、東北出身で口の重い中山さんはちやちやきの都会っ子で口も頭も回転の速いべらんめえ調の大岡さんが苦手のようだった。

そんなことがあって座は一挙にくだけたものになり、私は中山さんとも大岡さんとも急速に親しくなったものだった。

それから約十年後、茅ヶ崎の城山三郎さんとその頃は大磯に移っていた大岡さんとタクシーで豊岡（埼玉）の方迄ゴルフに行ったことがあった。また高速道路など首都高速の他には無い頃で三時間たっぷりかかったが、その間中、二人は、主として城山さんが聞き手になって歓談していた。

ところが突然、大岡さんが「畜生、アメ公の野郎、こんな広い土地を占拠しやがって」と叫ぶように言った。朝霞基地の門前だった。助手席に居た私と、大岡さんとずっと歓談をつづけていた城山さんは一瞬息を呑んだ。大岡さんは忽ち冷静さを取り戻し照れ笑いを浮かべながら、

「どうも俺は俘虜上がりのもんだから、ああいうのを見るとつかいっと来ちやうんだ」

あの叫びの底を流れるものが「浮虜記」や「野火」や「レイテ戦記」とどう関わっているのかは別として、大岡さんは「戦後昭和」

をも安易には許してないのだなと感じた。昭和四十年の芸術院会員辞退にしても同様である。

大岡さんを評して、自由な心で「昭和」を見つづけた「戦後文学の意見番」というような声がある。大岡さん自身も「盧溝橋事件以来の五十年を歴史の体験者として生きて来たが、俺は死ぬまで歴史の体験者として書きつづけて行くよ」と語っていたが、確かに、大岡さんの死は、一つの時代の終りを決定づけたようだ。

さて、私がこの稿を書き上げてから四日後の昭和六十四年一月七日、時代は昭和から平成へと替った。昭和史の体現者・大岡昇平が没して二週間後であった。新聞もテレビも一斉に昭和天皇の遺徳と新天皇・平成の未来を喧伝し始めた。最早死語になっていてもいいはずの「大本営発表」とか「大政翼賛会」といった言葉を想い起こさせる程の見事な大合唱であった。

戦後四十余年を経て、私としても今更「天皇の戦争責任」を論う気持はない。しかし、「立派」で「平和を常に願っていた」国民のために一身を捧げようとまでされた「昭和天皇の死を逆用して、一九五〇年以前の「昭和」を抹殺しようとする企ては許してはならないだろう。

田宮さんに始まり大岡さんで終った昭和六十三年に亡くなられた前記の方々は、いずれも明治末年に生まれ、二十歳前後で「天皇制ファシズム」に遭遇し、それからほぼ二十年間沈黙を強いられ、敗戦によってやっと思考と表現の自由を得て、「戦後」を創り育ててきた「昭和史の証人」であることは間違ひなく、彼らの死を以て私は一つの時代が終ったと実感するのである。